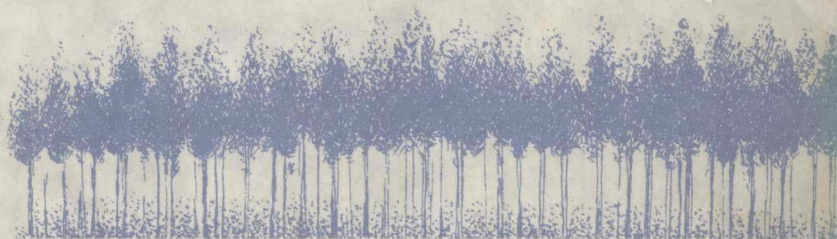




小熊秀雄

青馬の大きな感覚

高野斗志美



著者

高野斗志美（たかの・としみ）

1929年・北海道生れ

1953年・東北大学文学部哲学科卒

1968年・評論集『存在の文学』（三一書房）

1971年・長篇評論『安部公房論』（サンリオ出版）

1972年・長篇評論『井上光晴論』（勁草書房）

1974年・評論集『現代文学の射程と構造』（潮出版社）

1977年・長篇評論『倉橋由美子論』（サンリオ出版）

1978年・評論集『現代文学と北海道の作家群像』（北海道新聞社）

1979年・長篇評論『増補 安部公房論』（花神社）

現在・旭川大学教授

おぐまひでお
小熊秀雄——青馬の大きな感覚

1982年4月10日初版 1刷

定価1800円

著 者 高野斗志美

装 幀 熊谷博人

装 画 新井豊美

発行者 大久保憲一

発行所 かしん 株式会社花神社

東京都千代田区猿樂町2-2-5 興新ビル605 〒101

電話 東京03・291・6569 振替 東京 2-194949

印刷・信毎書籍印刷＋コーエー

©TOSHIMI TAKANO

製本・美成社 用紙・文化エージェント

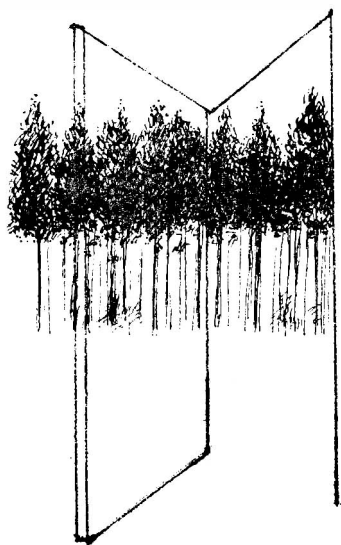
0095-820101-1092

Printed in Japan

小熊秀雄

青馬の大きな感覚

高野斗志美



花神社

目次

I部 民衆という、よいイメージ

- 1 笑う大砲——哄笑にひそむ絶望のドラマ、について 11
- 2 プロレタリア詩の新しい尖端——大いなる不安とのめぐりあい 16
- 3 選ばれた民衆の復讐人——生命力の喚起をめぐるドラマ 21
- 4 宇宙力のイメージ——天空に突入する一本の樹 27
- 5 見えざる円の中心——自己への呼びかけの激成 32
- 6 解体と変換——プロレタリア詩の純粹性の意味 39
- 7 革命の、おそすぎたテーゼ、について…… 44
- 8 アナーキズムとの交感——〈虚無のあらゆる形態の変形した前進〉というイメージ 49
- 9 農奴の作業——感覺的にまさまざと描きだされた知覚の光景 58
- 10 青馬の大きな感覺——直線的で、熱烈で、強固な 64
- 11 自由への悪夢——〈永遠の沈黙である血脈の内面的な不斷の進軍を続ける孤独の王者〉 69
- 12 闇の覚醒——巨大な火災になめつくされながら 75
- 13 走りつづける仮設——夜を走破していく青馬の感覺 79
- 14 覚醒との密議——〈戦ひの享樂児〉の面目 85
- 15 倫理主義の美学をこえて——〈感情のジャムをつくり／虚偽者の頭へ投げつけてやらう〉 90
- 16 灰色の歌の季節に——人間の本質の記録をめざして 97

- 17 現実との直接の交渉——小説への反感をめぐって 104
- 18 空想する力——匂いを嗅ぐためではなく発見するために 111
- 19 切迫した知覚のかたち——突進と、旋回と、転換と 122
- 20 訣別と回復——守備のために……攻勢のために……中野重治をめぐって 126
- 21 私性の抒情を撃つ——革命者の倫理のイロニー 132
- 22 生の抱括的風景——擁護されるべき人間の奥行 138
- 23 全円の角度にむかう知覚——長篇敘事詩の位置について 144

Ⅱ 部 生と死の同格

- 1 逆説の論理——「私は、いま幸福なのだ／舌が廻るといふことが」 151
- 2 見えざる詩の主格——「空が暗ければ／星は光るんだ」 159
- 3 開かれた虚無——よろこびの歌をひきずりだすこと 164
- 4 自由への弾性——野性と観念の爆発 169
- 5 饒舌のすすめ——陽気な直撃的イメージをたずさえて 175
- 6 内面化された社会的不安への挑戦——「明日勇壮に歌ひたいために／私は悲しむ、けふの真実を」 182
- 7 歯をむきだしてしゃべる人種——新しい根拠地へ出発する 187
- 8 歯で雷管をかむ——日本の詩の形式を爆破する 193

- 9 対象の平面化の危険——口の中からただ声を発する場合も 197
- 10 枕言葉のない日本語の問題——読む者にイメージの緊張した喚起を 202
- 11 反詩の核に先取されたもの——人間の新しい予感の集約 209
- 12 頂点の拮抗と均衡——第一義的なものの獲得にむかって 214
- 13 反世界の爆発——はげしい存在に灼かれて 221
- 註 231

あとがき 237

小熊秀雄略年譜 243

小熊秀雄――青馬の大きな感覚

Ⅰ部 民衆という、よいイメージ

君等は馬の幅広い頸を平手で叩いたことがあるか、それはすばらしい響きを発するものである、勇壮な、はつらつとした世紀の声である、また非常に彼の食欲が異常に潔癖なものでまた自然を咀嚼し嚥下する自由で敏感な大きな歯をもつてゐるのである

——「農奴時代」より

1 笑う大砲——哄笑にひそむ絶望のドラマ、について

岩壁におし寄せ叩きつけるはげしい波の唸りが小熊秀雄の詩をつらぬいている。呻き、とってもいい。それは涯てしない声だ。〈涯てしない声〉……いうまでもなくわたしはアンリ・ミッシェルの詩を思いうかべている。「涯てしない声」(『試練・悪魔祓い』小海永二訳)のなかでミッシェルはさけぶ、――

おれは笑う、おれは笑う大砲を持つ

小熊秀雄の詩人としての在りようは、笑う大砲、と呼んでいいだろう。撃ちやむことのない、いつまでも砲口を灼いている大砲なのだ。

そして、その在りようにおいてかれはついに、休息の時と場所をもつことができなかった。砲撃の連続が生きることの全容であるかぎり、砲声がたえたとき、かれは死ぬ。なぜそうしなければ

ばならなかったのだ？ などと問うことはだれにも許されないだろう。かれはただ、自分を連打してやまぬ内奥からの叫びに呼応したにすぎない。

だが、その宿命を生きぬきながらかれがどこに行きつこうと願っていたのか、と問うことは必要だろう。予感のむこうに立ちあらわれて来る本当の自分にむかって幻視の荒野を構成していくこと、その行為によってかれは詩人であったのだから。……

火をふいた海底火山がかれの内奥にあつて、そのために小熊秀雄は、みだれ飛び衝突しあう音響群にひしめかれた海圧そのものに化した。つまり、海鳴りになった。ふかくとどろく海鳴り。音をとどろかせながら、それを呑みこみ、さらに大きなとどろきを呼びあつめていく海鳴りであったから、現実の岸壁に叩きつけられるはげしい波は、おし寄せていくたびに激烈さを加え、純粹な激烈にいたろうとした。

ところで、唸りといい、呻きといい、根源の苦しみにうなされている存在感覚が行きつくのは、苦しみの破壊である。自己破壊ということだ。はつきりさせておくが、それは自虐ということではない。ひとたび始まった海鳴りは、目に見えない海底の暗黒から噴きあがりどどろく。海中から海原におしひろがって津波を激成していくそれは、おしひろがることにおいてもう後から追いかけてくる次の海鳴りに犯されているといえる。

海鳴りそのものが新しい内奥からの爆裂によって持続して破碎され、岸壁に叩きつけられている。その激成の光景は、いってみれば、在るかに見えた自己の根底を砕いて、在るべき本来のそれにむかつてさらに幻視を拡大していくところのすさまじい求心力である、というほかはな

いだろう。砲身は、砲身自体の炸裂によってしか発射の行為にひそむ意志を立証できないのだ。

太陽よ、

出口を示せ、出口を指させ、

入口があつて出口のない

世界があるとは私は信じられない

探す、そいつを、探せ、君も、

あいつ太陽が

暁と夜をすばやく走りさる

一瞬間の時間に急速に。

（「太陽へ」）

いまこそ悲鳴を精一杯あげる時だ、

いまこそ君の体から、肉の袋から

悲しみをすつかり

搾り出してしまふ時だよ、

（「泣上戸に与ふ」）

出口のない世界。そういう世界があることを信じない、と小熊秀雄はいう。勇敢きわまる信念だ。まさに、断つべきものとして鉄鎖のみを持つプロレタリアートの立場にかれは足をふんばっている。プロレタリアートの八方破れの楽天主義が横溢している印象である。

しかし……ほんとうにそうだろうか。一九二七年に書かれた「農民と詩の銃」——このエッセイはおなじ年の他のエッセイ「露西亜農民詩人エシエーニンの自殺」と密接しつつマルクス主義の強権化、プロレタリア独裁の〈へ羊の皮を着た狼〉のパラドクスをすでに体感している——の結びを小熊は次のようにしめくくっている。

精鋭な自らを苛責する詩の銃の所持をこそ私は期待する。

ちなみに参考として引いておけば、「露西亜農民詩人エシエーニンの自殺上」の結びは次のようになっている。

共産主義はすでに現在では強権主義の存在として農民を再び奴隷の穴にひきずり込まうとしてゐるのである。

労農同盟をめぐるプロレタリアートのヘゲモニーの戦略・戦術について考察することは別の機会にゆずりたいと思う。いま必要なことは、出口のない世界を信じないと主張している小熊秀雄

の、一見するといいかにも不屈にみえるプロレタリア・オブティミズムを組み立てているものが、じつは、へいまこそ悲鳴を精一杯あげる時だ」という、出口のない状況にふかくむしばまれた精神の逆境をしめしているのだという経緯を知ることにつきる。

「太陽へ」を読みかえすだけでいいだろう。入口も出口もない時代の檻に追いこまれることで自分の足場をすっかり根こぎにされてしまった者たちの呻きをそれは語っているわけだから。

出口をふさいでいるのは、むろん強化をかさねていくファシズムの秩序である。同時にそれとかさなりあうプロレタリア独裁への重い幻滅にはかならない。どこに出口があるというのだろう！ したがって、状況をきり裂いて出口をみつけたために、被支配民衆の一人ひとりには、しがみついている解放へのあらゆる幻想をみずからの内奥において否定していかざるをえないのだ。へ精鋭な自らを苛責する詩の銃の所持」とは、そういう認識と、そこから発する絶望、そして、それを踏んであらためて決意せざるをえぬ自発の行為のきびしさ……つまり、自己炸裂によってしか自己の願望をたしかめることができぬ民衆の憤怒そのものを表明しているといわなくてはならない。

笑う大砲であるほかはない人間……止むことなく岸壁に打ちよせて海鳴りを叩きつけるドラマティックなリズムの連打……小熊秀雄の詩のダイナミクス……。